

留学は就活に必須か : 「与える」ことの難しさ

著者	森田 由利子
雑誌名	エコノフォーラム21 : 学生と教職員のインターコミュニケーション誌
号	24
ページ	52-52
発行年	2018-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10236/00026876

2017年
12月13日
水曜日

私は経済学部で主に英語教育を担当している。それ故、「就活のために留学しておけと言われるんですが、やっぱり留学した方が有利なんじゃないか？」という相談を学生から繰り返し受ける。

もちろん留学は得難い経験を与えてくれる。私自身、留学経験から掛け替えのない多くのことを学んだ。なので、自分自身が望み、かつ、状況が許すなら、留学はした方が良い。しかし、「就活にとって必須か」と問われると、私の答えは否である。なぜなら、多くの学生と話をしている、語学留学以前に、もっとすべき大事なことがあると感じるからである。

相談された時、私が「自分自身が行きたいと強く思わないなら、別に留学する必要はないと思う」と言うと、学生は「じゃあ、就活のために

森田 由利子 教授（ライフ・ライティング、イギリス文化）

留学は就活に必須かー 「与える」ことの難しさ

何をしたらいいんですか」と聞いてくる。私の答えは、その担当学生の個性や状況を考えて、その時々で様々ではあるが、このところ「自分の行動パターンを変えることから始めてみたらどうですか」と答えることが多い。

具体的なアドバイスとして、「自宅で家族と暮らしているのなら、たまには、明日はゆっくり寝ておいて。朝ごはん作って洗濯もやっておくからって家の人にとってみたら」と提案する。そうすると、下宿生以外のたいていの学生は、「家で料理なんかしたことないし」と答える。そこで、「じゃあ、もうすぐクリスマスだけど、お父さんに何か小さなプレゼントをあげたら？」と言うと、「父親とは普段話をしないし…」と困り顔。あるいは、皆、あまりピンとこない顔をする。

私が学生に伝えたかったのは、就活がそんなに心配ならば、自分の行動パターンを変える、すなわち、「与えられる側」から「与える側」に変わるよう努力してみたらどうかということである。いつも食事を作ってもらうことを当たり前と思わず、たまには、作りに回る。日々の授業を、与えられるまま漫然と聞いているだけでは、興味のある講義があるならば、自主的に深く学び、教員を少し驚かすぐらいの質問を投げかけてみる。演習形式のゼミならば

なおさら、誰か他の人が発言してくれるだろうと人任せにして眺めていないで、自分が貢献できることは何かを考え、積極的にゼミに何かを「与えて」みる。殊更に特別なことや無理をする必要はない。まず、身近なところから、自分が人に、あるいは、その場に何を与えられるか、良く考

え、そして着実に行動することが、就活、さらには社会に出た時に役に立つ力を育てると思うのである。

ただ、「与える」というのは、とても難しいことである。前述の「小さなプレゼントをあげる」という行為を取ってみても、「その人の好きな物は何か、今、その人にとって必要なものは何か」ということを知っていないければならない。プレゼントに限らず、適切なものを適切なタイミングで「与える」ためには、常にか他者や周囲、さらには社会に関心を持ち、観察する力が必須となる。創造力も必要である。そして、何より、「与える」という行為の根本に、思い遣り、配慮する心が無ければ、意味がない。企業や組織が求めているのは、留学経験の有無やTOEICの点数ではなく、そういう力なのではないかと私は思う。